

SHINMACHI SITE



志摩町歴史資料館第7回特別展

支石墓が語るもの

展示図録

志摩町歴史資料館



特別展『支石墓が語るもの』 の開催にあたって

新町遺跡が初めて発掘調査された時、多くの支石墓や土器、そして日本では他に類のない弥生時代早期の戦死者の人骨などの発見に、新聞紙上は賑わいました。

続く2次調査では、早期の墓域および前期、中期へとつながる墓地の範囲が確認され、遺跡の広がりや確実に把握することができました。

それから今日までの13年間、日本列島では話題の遺跡が続々と登場し、空前の考古学ブームとなっています。しかし、従来の稲作や渡来人に関する一般的な考えを根底から覆すような遺跡の発見は、この新町遺跡をおいて他では見ることがいまだありません。

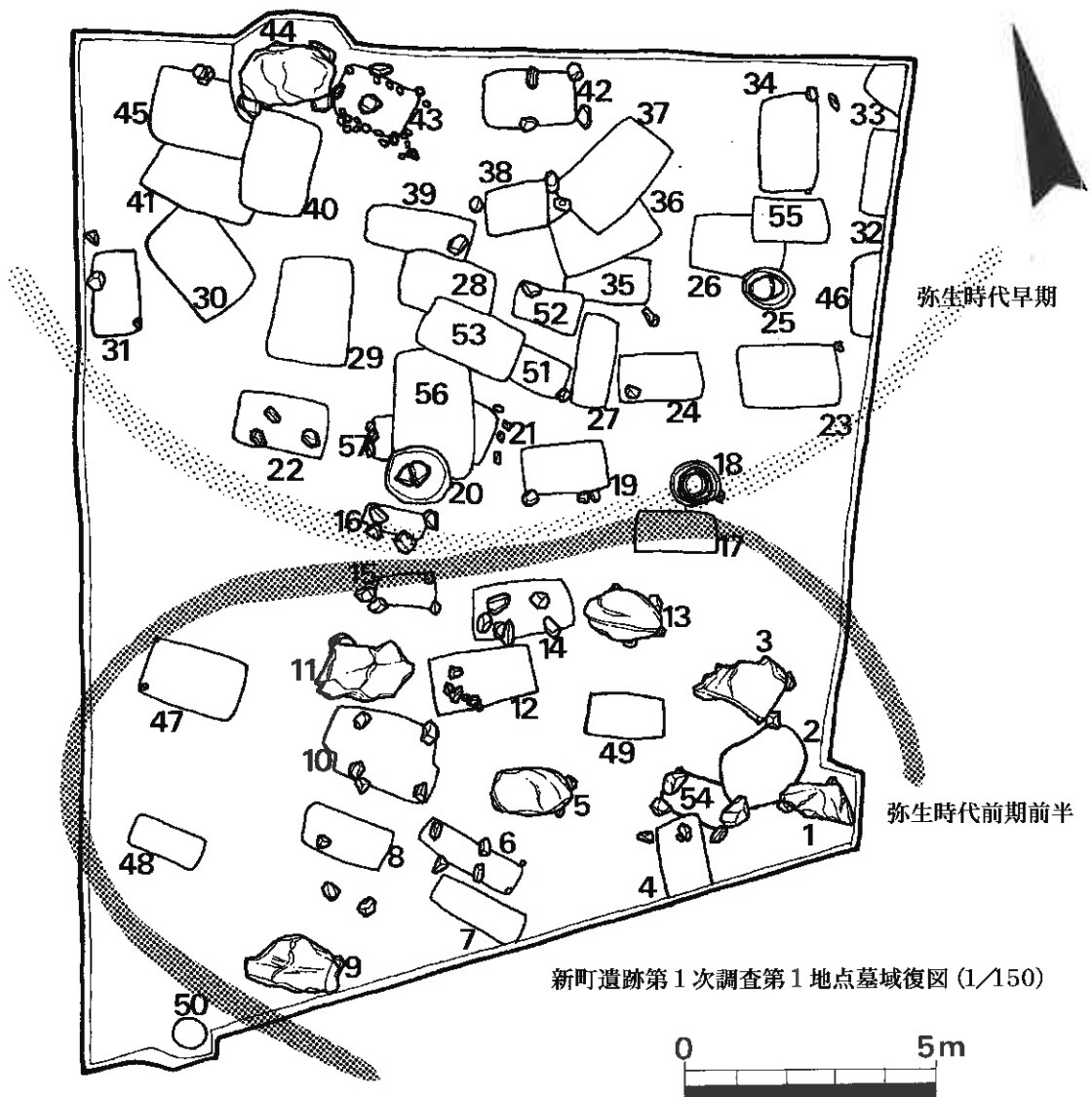
現在の日本文化の根幹をなす弥生文化の開始期を、再度見つめなおす意味で今回の特別展を開催いたしました。これにより、皆様に新町遺跡の重要性を再認識いただければ幸いです。

最後になりますが、本展開催にあたり、ご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げ、挨拶にかえさせていただきます。

1998年10月20日
志摩町歴史資料館



1次調査 第1地点 13号支石墓



支石墓の源流

支石墓の祖形をたどっていけば、フランスのブルターニュ地方に数多く点在するドルメンに発端をみることができる。

巨石建造物 (Megalith) の一形態であるドルメン (Dolmen) とは、巨大な一枚の天井石を複数の板石で支えたテーブル状の構築物のことを指し、その語源はブルトン語で「石の卓」の意味を持つ。実際、中世ヨーロッパではその詳細が不明であったため、ドルメンを「妖精たちの食卓」などと称している。

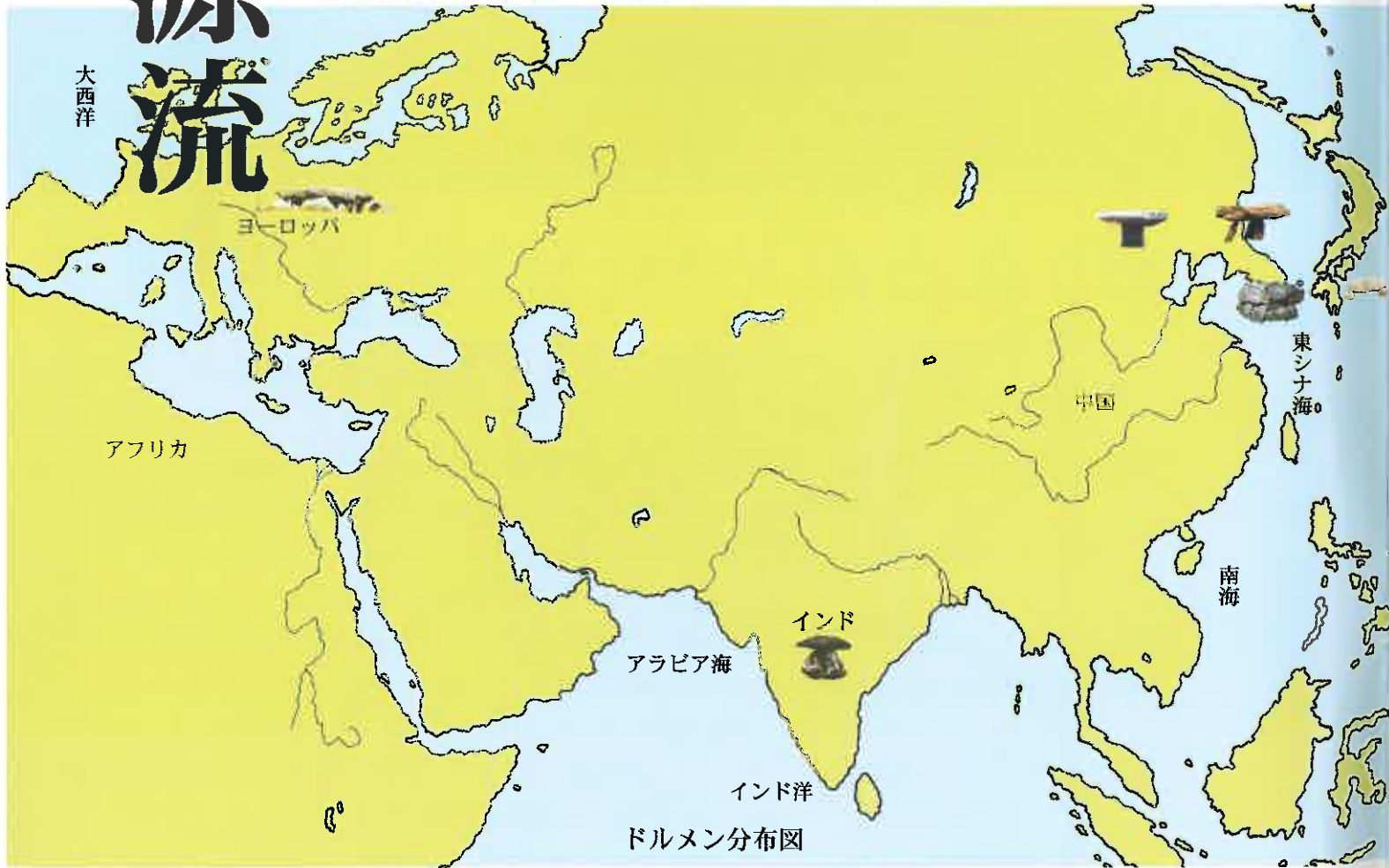
現在、ドルメンは紀元前 4,000 年から 2,000 年にかけて構築されたと考えられ、ヨーロッパで最初の農耕民が建設者とされている。これらは元来ケルン (積石) に覆われていて、ドルメンそのものは墓所の内部主体として用いられていた。現在ヨーロッパに分布するドルメンの多くは石室が露出したものである。

ドルメンは、農耕文化の伝播とともにユーラシア大陸を東へと進む。

インド全域に分布するドルメンは、紀元前 1,000 年ごろから建設され、インドで鉄器が使用され始めた時期と一致する。

インドのドルメンは、「帽子またはキノコ状の傘石」(トピーカルもしくはクダイカル) とも呼称され、ドルメン自体が箱式石棺墓となっており、マウンドは持たない。

この文化の担い手は、移動を常とする牧畜民とも、インドにおける初期農耕民で



あるとも考えられている。これにより、ヨーロッパからの伝播ルートが陸路と海路の二説に分かれているのが現在のインド考古学の現状である。

中国東北部に分布が知られるドルメンは、ようやく「支石墓」という名前を与えられる。

遼東半島という限定された地域に300基以上確認されている支石墓は、地上に埋葬施設が露出した卓子形（石棚）と、地下に埋葬施設を持つ大石蓋墓の二つの形式に分けられる。

先行するのは卓子形で、最も古いタイプで紀元前二千年紀から見られ、大石蓋墓はこれに追従するように現われるが、卓子形が集団墓の形をとっているのに対し、大石蓋墓は個人葬用のものとして造られている。

卓子形は遼寧省から朝鮮半島北部まで広く分布し、そのため北方式ともいわれている。

一方、大石蓋墓のように地下に埋葬施設を持つが、地上に置いた支石に大きな上石を置く基盤形は主に韓国に集中して分布することから南方式と呼ばれる。

日本の支石墓に直接影響を与えたのは、この基盤形である。しかし、朝鮮半島のものに比べ小型であることと、地下の施設が朝鮮半島のものがその多くが石室であることに対し、日本のものは木棺、甕棺、石棺、土壙などと多様な内部主体を持つなど、日本独自の支石墓として発展したことがわかる。

ヨーロッパを出発したドルメンはここ日本が終着駅となったが、それは西北九州から広がることはなく、稲作受容期の短期間で終焉した。



La Bretagne des mégalithes より転載



中国 析木城



江華島 富近里支石墓



慶州 道只洞支石墓

弥生の造形美



新町遺跡出土弥生時代早期土器群

縄文後期後半から晩期の遺跡に朝鮮系遺物が現われるようになる。一方、韓国釜山の東三洞貝塚からは、佐賀県腰岳産の黒曜石が出土する。これは、玄界灘沿岸に生活する人々が海を越えて朝鮮半島間を往来していたことを示すものである。

西北九州にこの実績があったからこそ、稲作や支石墓といった文化は当地の人々に受け入れられたのであろう。

新町遺跡は日本文化史上の一大転換期に出現した遺跡であり、ここから出土した甕棺や副葬土器は、まさに稲作受容期の土器を代表するものである。

弥生時代早期の甕棺では、2次調査Ⅱ-01-1号墓の曲り田（新）式が最も古い部類に入る。肩をいからせたように胴部の最大径が頸部付近にあって、やや胴長の印象が強い。

これに続く1次調査の25号墓下甕は、18、25号墓甕棺と同じ夜臼式である。しかし、18、25号のものとは比べ、胴部の最大径がやや上方にあるため、古い要素を持っている。

同時期の土器として、甕棺以上に目立つものに副葬小壺がある。これらは墓壙の肩あたりに供えられ、例外なく人骨の頭位に置かれていた。

45号墓の曲り田（古）式の副葬小壺を最も古いものとし、以降曲り田（新）式、夜臼式と続く。

新町遺跡出土の小壺の多くを占める比較的胴部が丸みを持つものとは異なるものに、27、33号墓の小壺がある。前者に比べ、二つの小壺は、口縁が外反し、頸部も直立に近く、胴部は屈曲する特徴を持っている。27号墓のものは黒色磨研である。

この形は板付Ⅰ式の壺に引き継がれ、それは22号墓の小壺でも見られるものである。

甕棺、小壺ともに、その多くに丹塗と表面の磨研が施され、2,300年経った今なお美しい光沢をはなっている。全体のプロポーションも非常に端正であり、弥生時代の造形美はここから始まる。

日本最古の戦死者



24号墓1号人骨出土状況

弥生時代は稲作農耕の開始をもってはじまる。西北九州地方は、弥生文化の最も古い痕跡を残す遺跡が点在する地域でもある。

弥生文化の根源が大陸から伝播してきたことは確実であり、このことに「渡来人」が深く関わっていたこともまた、異論のないところであろう。

しかし、一口に渡来人と言っても、彼らがどのような形で従来の縄文文化を変質せしめたのかはいまだ結論がでていない。

また、原住民の縄文人はどのような態度で彼らの文化を受け入れたのか、結果としてそれは享受であったのかは今後の重要な課題でもある。

新町遺跡出土の人骨、特に1次調査の24号墓から出土した2体の人骨は、この課題に重要な問題をなげかけたことで貴重な資料となった。

24号墓は検出された段階では上部構造はなく、支石墓であったかはわからない。副葬小壺は夜白式に属するもので、早期の墓である。

墓壇の底には、四隅に花崗岩の板石が内側に傾斜して立てかけられるように配置してある。木棺を置く台としては不適切な形状なので、木棺を固定する裏込めとして置かれたものかもしれない。

この板石に囲まれるようにして、1号人骨は出土した。

人骨は両手を腰の上で重ね、膝を曲げた状態である。頭部とその周辺は赤く染まっていて、赤色顔料がかけられたことがわかる。

ほぼ原位置を保っているが、腰骨の下に別の穴が掘られていて、そのために若干腰骨がずり落ちている。この穴からは1号人骨とは別固体の歯が出土し、これを2号人骨とした。

朝鮮半島の支石墓

海南郡 花山面 蓮井里支石墓群

朝鮮半島南部に数多く分布する碁盤形（南方式）の支石墓は、直接日本の支石墓に影響を与えたものである。

しかし、日本の支石墓は南方式を踏襲しているに止まり、細かい点では導入時から日本独特のものと変化している。両者を比較しながら南方式の特徴を示すと、まず第1に、日本のものは上石が小型である。第2に地下構造が異なる。

朝鮮半島のもは、石室を構築した後に木棺を入れることが一般的で、石室にも種類があり、石室形、石郭形、圍石形などさまざまである。

ちなみに、日本のものは、木棺、土壙、甕棺、石室と地下構造はバリエーションに富み、新町遺跡では（と言うより、初期の支石墓全般に言えることだが）幼児は甕棺に、成人は木棺に埋葬するという年齢による形態の分化すら見られる。

また、支石を持たない支石墓もあり、これを含めて南方式と唱えられていたが、近年では蓋石式として分化された。

一方、朝鮮半島北部には卓子形、つまりテーブル状で、地上の板石の支石に囲まれた空間を埋葬施設とするものがあり、中国東北部の石棚と同じく北方式とも呼ばれる。

韓国の研究者間では、北方式から蓋石式、南方式へ変遷するという観念が一般的になっている。

北朝鮮の学会では箱式石棺に類似する小型支石墓が発展し、その変遷の過程で卓子形と南方式が発生したという変遷観を打ち出している。

いずれにせよ、将来は日本の支石墓を含め、東北アジアの視野にたった総合的な支石墓研究を推進する必要が生じてくるであろう。



全羅北道 高敞 道山里支石墓



德山里支石墓



慶北迎日郡 杞溪面 文星里支石墓



三千浦 新碧洞 支石墓群



月城郡 内南面 店石里支石墓



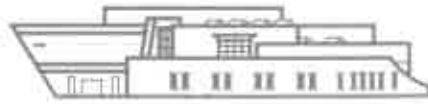
清道里支石墓群



麗山平呂洞支石墓 (内部主体)



金海市 龜旨峰支石墓



志摩町歴史資料館